

PROLETARIAN

NO. 4
月一回発行
1976.4.15
定価 100円

共産主義者同盟

プロレタリア派

◎ 共産主義インターナショナルの再建を目指し、ベトナム革命の勝利に応え 米独日国際反革命枢軸体制の心臓部において、現代世界の三つの革命的潮流の合流点として、革命的マルクス主義、ボリシエビキの党、プロフィンテルン潮流を復権し、日帝打倒・ソビエト権力樹立・プロレタリア独裁に向けて進撃しよう！

◎ 米日韓反革命臨戦体制粉碎！ 日帝の朝鮮侵略反革命戦争粉碎！ 自衛隊 三軍の朝鮮出兵阻止！ 日帝による朝鮮経済の隸属化・債務奴隸化・植民地化粉碎

国際情勢

1. 「我々の勝利は、正しい革命路線の大勝利である。ベトナムの条件にマルクス・レーニン主義の学説を創造的に適用することによって、我党は、二つの旗—民族民主革命の旗と社会主義革命の旗—を高くかかげ、闘争に人民全体、我国全体を最大限に动员するため民族独立運動の展開力と社会主义の威力とを一つに結びつけた。我が党は一国の勢力と現代の革命勢力、国内勢力と国際勢力を結合し、敵のあらゆる内部矛盾を利用して。そうすることによって、侵略者に勝つための一大連合力がつくりだされた。我が党は、二つの力—大衆の政治闘争と革命的武装力—に依拠し、武装闘争と政治、外交闘争、大衆の蜂起と革命戦争とを結合し、たえず攻勢戦略をとり、それと同時に勝利を一步一步かちとり、敵をじりじりと後退させ、こうして完全な勝利をおさめることができた。」

「現在の国際情勢の特徴は、現代の三つの革命的潮流—全ての分野で急速に発展し、その優越性をますます發揮し、不敗の勢力となっている社会主義体制の諸国、かつてなく大規模なものとなつた資本主義諸国の労働運動、岸を洗い流す激流のように強まり、ますます大きな勝利をたえずおさめている民族解放運動—の威力がたゆみなく増大していくことである。この三つの流れは、合流して一つの大きな革命的昂揚を形成し、政勢に出て帝国主義をじりじり圧迫し、そして各個に擊破している。」(ペトナム労働党 レ・ズアン)

朝鮮労働党の三大革命—思想革命、技術革命、文化革命、ベトナム労働党の生産関係革命、科学・技術革命、思想・文化革命—その中で科学・技術革命が要となる—の三つの革命によるプロレタリア独裁下における社会主義経済建設の継続革命としての展開を支持し、他方でその他多くの労働者国家の党と国家において、非レーニン主義、修正主義（トロツキー主義、バーリン主義）が権力を掌握し、レーニン主義分派が少数派であり、資本主義的諸傾向、小ブルジョア思想が復活されていることと関わなくてはならない。

「日和見主義は我々の主要な敵である。労働運動の上層の日和見主義は、プロレタリア的でない、ブルジョア的な社会主義である。労働運動内部の活動家で日和見主義的な傾向に属するものは、ブルジョア自身よりもすぐれたブルジョアジー擁護者であるということは実践的に証明されている。」(レーニン コミンテルン二大会)

「経済闘争の革命化への途上において、赤色労働組合運動が排除せねばならぬ最大の障礙は、労働者階級の広大な層に対する、改良主義及びその他の反動的組合の制圧の特殊体系である。改良主義者とその他の反動的組合の制圧の特殊体系であって、それは今尚益々強化しつつある。かかる障碍の克服は、反動的組合の内外において労働組合官僚に対して強力に闘争することなしには不可能である。かかる組合の指導者と労働者組合員大衆は、無条件的に区別されねばならない。若干の革命的同志達が社会ファシスト的労働組合指導者の影響から、組合員大衆を解放することを絶望的なことだと考えている場合には、このことは、かかる同志達が正しい大衆に解り易い方法で社会ファシストに対する闘争を遂行する能力がないことの否定し得ざる証拠であるにすぎない。」

「如何なるストライキにおいても、ブルジョア的・反動的労働組合運動と革命的プロレタリア的労働組合運動との間に闘争地位をめぐる闘争が行なわれるものである。「左翼的」遁辞をもって改良主義者によつて始められたストライキに参加することを拒絶するところの若干の同志達のやり方は、かかる闘争に対する日和見主義的回避以外の何ものでもない。」(ロゾフスキー プロフィンテルン五大会)

かかるコミニンテルン、プロフィンテルンの原則の下に、帝国主義国において、大規模に労働運動が前進しているのではなく革革命的、國際主義的労働運動は確固たる少数派であり、それはコミニンテルン七大会以降の國際プロレタリアート、國際共産主義運動の解体に対する帝国主義諸国におけるレーニン主義、ボリシエビキ党の復権と一体である。

今日の帝国主義世界の基本的矛盾は第一に、市場再分割をめぐる帝国主義諸国間の不均等発展であり、西独・日本帝国主義は、英・仏帝国主義を追抜き、米帝国主義と共に國際帝国主義の最も反革命的、最も侵略的なプロックを形成した。それは原科資源の確保と、市場獲得のために帝国主義諸国間の不均等発展を極限にまで高め、その過程は他方で、全ての帝国主義国において長期的、漫性的な過剰生産恐慌が発現し、それは、合理化の強行、失業の増大、賃金の低下としてあらわれ、戦後二〇余年間、帝国主義の労働運動において、その上層部を制圧した反動的、改良主義労働組合機構の長期にわたる危機の開始を明らかにした。

第二に、國際帝国主義と國際プロレタリアートの基本的矛盾は、三プロックの階級闘争、三つの革命的潮流が合流するといふ命題の下に、一九七五年四月三〇日のベトナム革命の完全勝

利をメルクマールとして单一の國際革命勢力として、帝國主義の國際反革命の、とりわけ、三大支柱としての、米独日三大帝國主義の打倒、世界プロレタリア獨裁の樹立に向けてその主戰場を植民地従属国における各個擊破から、主要な帝國主義の連続的・同時的な打倒に向いつつある。

従つて、他方で帝国主義は、その延命に向けて旧来のようないに第一に、本国の労働者階級を買収し、かかる一部分の買収を根拠とした反動派社民潮流による労働組合の制圧は合理化・失業・賃金低下を自らが積極的な執行者となることによって行なわしめるにとどまらず、第二に、旧植民地従属国において、植民地と後進国（第三世界）の独立が「先進国のプロレタリアートの援助を得て、後進国はソビエト制度へ移り、資本主義的発展段階を飛びこえて、一定の発展段階を経て共産主義へ移ることができる」という命題を確立し、理論的に基礎づけなければならぬ。」（レーニン・コミニンテルン二大会）という命題が原則とされるのではなく、逆に帝国主義の巻返しによって資本主義と民族的裏切り者をその上層にすえ、かかる帝国主義の代理人を拡大せんとしている。彼等をぬきにしては、帝国主義はその支配を維持することはできない。ベトナムに続くアンゴラでの米帝に対する民族解放闘争の勝利はかかる傾向により一層の拍車をかけるであろう。

日韓情勢・國內情勢

かかる帝国主義の危機の諸特徴は、政治的には、ベトナムに続くアンゴラでの敗退であり、依然として、アラブ諸国とアフリカ諸国、ラテンアメリカ、アジアの諸国において、最も原則的な民族解放闘争と帝国主義が革命と反革命の自立的民族経済と金融的従属との激突を繰返し、帝国主義が全ゆる中間潮流をその再編の支柱としつつ、延命と反革命的軍事攻撃の野望を狙っている。

そこにおいては、イスラエル、南アフリカは新しい型の反革命一ファシズム政権であり、人種差別と民族抑圧、金融的支配の尖兵である。

治をうけ、今日すさまじい日帝の再侵略、金融的支配をうけ、同時に、帝国主義の国際反革命と国際革命勢力の激突の最前線である。

鮮人民の祖国統一・民族解放の斗いは、全ゆる彈圧に屈せず、金芝河を始めとする有名無名の民主人士、青年学生、労働者を始め、各階層の人民に支えられ、着々とその深部において朴独

我々は韓国における支配形態と、日本における議会制民主主義の名によるブルジョア民主主義独裁は、本質的には、全く同一であることをはつきりととらえ、その上にたって、韓国民衆の反独裁・反外勢の全ゆる斗いを支援し、日本プロレタリアートの全ての斗いにおいて、第一義的な政治課題として、労働運動と日韓一入管闘争を結合させ、かつ、コミニテルンの反戦闘争の諸原則を堅持し斗わねばならない。

3. 帝国主義の危機の経済的特徴は第一に、国家独占資本主義の国際機構としてのIMF体制が破綻し、不換ドルの支配体制が再編され、なし崩し的にドル体制の内部に円ブロック、マル

り離すという最も困難なる任務を放棄してもいいということを意味するものでは断じてない。日本におけるプロフィンテルン

支持者は凡ゆる方法を以て朝鮮の同志を援助しなければならない。」（プロフィンテルン 朝鮮革命的労働運動テーゼ 一九三〇年九月）

かかる原則を、今日においては、より大胆に強化されたものとして革命的プロレタリアートの最も國際主義的なベゲモニーの下に日本帝国主義の全ゆる兵糧の内部に文字通り、日帝の朝鮮侵略反革命に対する全ての血債をかけた革命的組織を建設しきらねばならない。

日韓一入管闘争は、第一に、一九一九年三・一蜂起においての、

第二に、一九二三年関東大震災朝鮮人虐殺においての、

第三に、一九三〇年代の抗日バルチザン闘争への、

第四に、一九二〇年一四〇年代にかけての朝鮮人・在日朝鮮人の英雄的闘いへの、

第五に、中国侵略戦争への国家総動員体制と一体の強制連行に對して、

第六に、戦後南朝鮮の英雄的反米帝民族解放闘争と、朝鮮戦争（祖国解放戦争）に對して、

第七に、南朝鮮における斗いに呼応した四八年阪神教育事件を始め、日本労働者階級の日和見主義の中で五二年血のメーデー事件、吹田事件における在日朝鮮人の闘い、

第八に、六〇年四・一九学生革命、

第九に、六五年日韓条約と、日帝の全面的朝鮮再侵略、

第十に、第六・第七の闘いの力關係の諸結果としての法律一二六号と、かかる力關係に対する日本労働者階級の主要な労働運動を社民潮流に支配された結果としての民族差別的・排外主義的日本帝の同化追放攻撃への客觀的な支柱化の中での協定永住権強要をテコとした在日朝鮮人・韓国人各階層へのかかる攻撃の強化、

第一に、全ゆる尊圧に屬せず、七三年ソウル大決起以降、連續と斗い抜かれる反ファシズム・祖国統一闘争に対して、これら全てにおいての朝鮮人民への日本労働者階級の闘争を極めて反動的、排外主義的なその歴史的現実と、他方でコマンテルン・プロフィンテルンより提起された国際主義の理念に對して、何としてもその両者を後者の下に統合させる歴史的闘いとしてあるといふことを確認し、沖縄解放闘争、部落解放闘争等の中に、プロフィンテルンの斗い、プロレタリア婦人解放闘争等の中に何よりも大胆にもち込み、一切の市民主義、合法主義を克服し侵略主義、排外主義、差別思想と斗い、日帝打倒・ソビエト権力樹立への戰略的水路として斗い抜かねばならない。

5. 日本帝国主義の經濟的危機は、第一に六五年 IMF・JCDの結成に始まる、七二一七四年春闘にのぼりつめる春闘、又六年同対審答申、六九年特措法によって大きく切開かれた巨額の同対予算の獲得、それにも関わらず、日本の勤労大衆の実質賃金は停滞又は低下し、より貧富の差は格大し、合理化は強化され、失業攻撃は下層労働者群に集中し、労災職業病の発生は下請労働者、婦人労働者に集中している。

これら全ての現象は、危機の時代において、日帝ブルジョアジーは、自民・農社・ブルックによる地域一生產点を貫ぬいた專制的・ファシスチック的侵略的支配体制への移行を狙い、その前期

における安全弁であり、同時に合理化攻撃の執行者として社民潮流があるということを明らかにしている。

従つて經濟的情勢においては我々はより有利であり、長期にわたる出口のない經濟的危機は七五年をマルタマールとして戰後の相對的安定期は終了し、以降小刻みに好況と不況を繰返しつつ、より經濟的危機が成熟するものとして持続するが、政治的には日帝・金融ブルジョアジーの支配は、政黨的には、社公民路線をマヌーヴィーとした即ち、實質的な支持者とした自民・民社連合への再編であり。（それは、極論すれば韓国朴体制及び天皇制・天皇制イデオロギーによる侵略体制と、地方での日本労働運動における社民潮流の対外侵略を承認する四団体共闘路線による革マルや協会を尖兵とした全金本山や電通船橋、解同内の革命的反社民潮流へのロックアウト体制を二大支柱としつつ）それは社民潮流による生産点でのロックアウト体制と公然たる地域社会での公的・私的暴力の諸体系によつて、日本労働者階級を天皇制・天皇制イデオロギーを頂点として、侵略総動員体制に組込まんとしているのである。高度成長によつて形成された巨大な生産力は、今後長期の不況を経つても、それは長崎ーファンズムか、プロ独か以外によつて解決されえないものとして存在している。

今日、社共は小市民と上層労働者の帝王主義反対派に安住し、金融資本と朝鮮植民地化という經濟的基礎の上に、生活の安定と民主主義と平和が到来するかの如き幻想をふりまくことによつて、天皇制・天皇制イデオロギーによる朝鮮侵略反革命体制の支柱としている。我々は國際主義の精神で武装され、今日（3）の經濟的不安定の状態の中で、革命的プロレタリアートの資本主義經濟体制への決起をプロフィンテルン潮流として組織化しなくてはならない。

かつてドイツにおいては、社民潮流とファンズムの金融資本によるプロックの前に、ドイツプロレタリアートは敗北した。一九二八年、ルールの鉄鋼争議においての一五万人の労働者のロックアウトと組合除名、失業攻撃を数万人、数十万人、数百万人の規模において、社民党の労組官僚体制の下に執行され、二九二二年の三年間に一七〇人の共産党に属する労働者が官憲に虐殺され、二四〇人がナチスのテロルによって虐殺された。しかもその最初はベルリンのメーデーデモであり、社会民主黨員であり、ベルリン警視監であるツェルギーベルと同じくワイヤー・フィンテルン潮流の斗い、プロレタリア婦人解放闘争等の中に何よりも大胆にもち込み、一切の市民主義、合法主義を克服し攻撃の他方においてナチス党は進出し、一九三二年夏には、かかるこの暴挙に労働者はベルリンの労働者街にパリケードを築いて防衛し斗つた。更にドイツ共産党的戰闘組織としての赤色戰線戦闘者同盟の非合法化を初めに行なつたのは社会民主党セヴィーリング内相であり、このような社民党の權力機構と労働組合機構を駆使し、他方でファシズムを積極的に支持した反労働者の攻撃の他方においてナチス党は進出し、一九三二年夏には、かかる二八・二九・三一年の三年間における労働運動において社民党支配に対する共産党的敗北の中で、国防軍を背景としてナチスは工場地帯、労働者街に進撃しそれを暴力的に制圧した。ハノブルク地区のアルトナにおいては労働者はこの襲撃を撃退したが、それは労働者の逆襲の組織化に到らず、全国的な反革命の制圧を許した。

かかる敗北の結果として、コミニンテルンとドイツ共産党は敗北の総括を社民との統一戦線に求めたが、それは総括の本質を解明するものではないし、又、反ファシズム戦闘の放棄という総括も、史実は、社民労組官僚機構とナチス突撃隊とのブロックの前に敗北したのであり、誤りである。

既に一九三〇年代の経験において明らかのように、國際ブルジョアジーは、ドイツにおいては、社民ーワイマール共和政府と、ナチス突撃隊ー反革命ファシズム政権の緊密なブロックによってドイツブルタリアートの戦闘力を政治的・軍事的に攻撃し、自己の延命を策した。

第二次帝国主義戦争は独・伊・日の最も侵略的・反革命的ブロックと米英仏帝国主義とソ連との同盟として直接的にはあったが、他方において、客観的には、ドイツのナチス支配体制と、アメリカのニューディール体制が帝国主義世界防衛の緊密な歴史的ブロックを形成し、ソ連を軍事的に封じ込め、戦後、國際的社民潮流をAFL・CIOのヘゲモニーの下に再編した。

今日の西独社民政権、英労働党政権、仏・伊における共産党的伸長は、國際帝国主義の本格的な危機の時代におけるその序曲に他ならない。

6. 一九二〇年代の相対的安定期は第一インター的残存物をいまだ整理し得ておらず、他方で、革命的な訓練が充分に完了していない党であったが、主要な資本主義国において、共産党が存在し、資本主義国の労働運動において、不斷に革命的情勢を強化してきた。

そういうた主体的变化、即ち、主要な帝国主義国の労働運動におけるボリシニビキ的要素の強化と客観的变化、革命的情勢の到来が結合したのが第三期論の時代である。

第二次大戦後の相対的安定期は、人民戦線路線と、戦後革命の敗北の中で、各国共産党におけるボリシニビキ的要素が決定的に排除され、日和見主義と反レーニン主義に帝国主義本国の共産党が転化する中で開始され、五〇一六〇年代を通じて、約二〇年間にわたって続けられた。

我々、日本の共産主義者は、かつてドイツの共産主義者が一九二三年秋のザクセン・チャーリング政府（社民党と共産党の統一戦線政府）の経験によって、党中央の日和見主義と斗い、それらを更迭したようには、戦後労働運動の党的日和見主義と、階級の敗北の歴史を総括しえなかつた。

それは、四七年二・一セネストの日和見主義、四八年の阪神教育事件、四九年の企業整備と五〇年のレッド・ページ、五一年の血のメーデー、吹田事件、五七年の国労新潟、六〇年の三井三池等の、自然発生性を内部と外部から決定的に再編しえず、日本資本主義 자체としては、相対的安定期の内部において六七年一〇・八闘争と六九年秋期決戦の渦中から、眞のレーニン主義ボリシニビキ党の決定的な形成過程の端初が開始された。

「マルクス主義者にとっては、革命的情勢なしには革命は不可能であり、しかも、どんな革命情勢でも革命へ導くとは限らない、ということは疑問の余地がない。一般的に言って、革命的情勢の徵候はどういうものか？次の三つの主な徵候をあげれば、恐らくまちがいはなかろう。

一、支配階級にとって、不变のかたちでは、その支配を維持することが不可能になること。「上層」のあれこれの危機、

支配階級の政治の危機がキ裂をつくり出し、それにそって、被抑圧階級の不満と憤怒が爆発すること。革命が到来するには通常「下層」がこれまで通りに生活することを「欲しない」というだけではたりない。更に「上層」がこれまで通りに生活するこどが「できなくなる」ことが必要である。

二、被抑圧階級の貧困と窮乏が普通以上に激化すること。

三、右の諸理由から、大衆の活動が著しく高まるること。大衆は「平和」な時期には、おとなしく搾取されるままになつてい

るが、嵐の時代には、危機の環境全体と「上層」そのものとによって、自主的な歴史的行動にひき入れられる。

「即ち、革命的情勢が存在することを大衆の前に明らかにし、その広さと深さを説明し、ブルタリアートの革命的自覚とジアジーの代理人となつて支配している社民潮流の支配から革命的決意をよびさし、ブルタリアートをたすけて革命的行動にうつらせ、この方向で活動するために革命的情勢に応じた組織をつくりだすという義務がそれである。」（レーニン第二インターの崩壊）

今日の、とりわけ、七五年以降の帝国主義の危機の客観的情勢化、即ち革命的情勢がにつまつていく時代にあって、我々は「おとなしく搾取されるままになつてている」大衆を、それをブルジアジーの代理人となつて支配している社民潮流の支配から切り離さなければならない。

それは同時に、他方において、革命的情勢が到来しながら、いまだ、眞の意味での革命的な労働者の攻勢を組織しえないのであって、我々は、今日の社民潮流をヘゲモニーとする、今日の労働運動の見せかけの攻勢の内部と外部から、ブルタリアート（国際主義と革命的経済闘争の両翼から、革命的労働運動の攻勢）を七〇年代後期の日本労働運動において斗いとらなければならぬ。

この斗いの最前線に立ち、それを実現する斗いの中で、最も国際主義的なボリシニビキ党の中核がきたえられ、闘いと従来のままでは存在することができなくなるまでに成熟したところの日和見主義である。

「社会排外主義とは、一定の程度まで成熟した日和見主義、即ち、社会主義政党の内部でこのブルジョア的なはれものが、従来のままでは存在することができなくなるまでに成熟したところの日和見主義である。

社会排外主義と日和見主義との極めて密接な、切り離すことのできないつながりを見たがらない人々は、個々の場合や、「特殊事例」をとらえて、これこれの日和見主義者は国際主義者になったの、これこれの急進主義者は排外主義者になったのといふ。だが、これは諸思想の發展に関する問題での真にまじめな論拠ではない。第一に、労働運動における排外主義と日和見主義の経済的基盤は同じ一つのものである。

即ち、それは、「自分の國の資本の特權のおこぼれを頂だいし、ブルタリア大衆に反対し、一般に労働者と被压迫者の大衆に反対する少数上層のブルタリアートと小市民の同盟である。第二にこれら二つの思想的・政治的内容は同じものである。第三に、大体において、社会主義を日和見主義的思潮とわかる第二インタナシヨナルの時代（一八八九—一九一四年）に特有の古い区分は、排外主義者と国際主義者にわける新しい区分に対応している。」（レーニン 第二インターの崩壊）

我々は、今七六春闘を起点に、七〇年代後期の労働運動を通じた帝国主義の支柱であり、かつ、それに擁護された社会排外

主義潮流との全国的な斗いに突き進まねばならない。

それは、五〇一七〇年代前半の苦闘の中で我々が獲得した、プロレタリア国際主義の原則の復権を歴史的な日本労働者階級の排外主義、侵略主義に支配された斗いの総括、とりわけ、朝鮮民族の斗いと、在日朝鮮人の斗いへの裏切りへの痛苦な総括をこめて斗わねばならない。

全国の労働運動の全戦線に国際主義か排外主義かの分岐をしつかりとうちたること。

(○ページより続き)

力彈圧の全面的な扱い手である支部へと自己の飛躍をかけて、この間の支部内の討論の蓄積がなされてきた。我々は、單に、

実力突破の敗北の結果としての合法的こう着状態の中、「原則」を言い、現状の強化拡大を言うだけでは不充分であり、本山資本の徹底的な敗北に向けた血みどろの闘いと自己変革を支部と共に斗い抜き、断固たる勝利を斗い取らねばならない。

第二に、今日、全港湾や造船産業で開始されている下請労働者、臨時労働者の苦闘をとりわけ、官公労、民間大企業の本工労働者が最も意識的にかかる斗いと結合し、まさに労働運動

が、「強制調停裁判による全ての経済闘争の「平和的」調停、改良主義的機構による労働者の要求の系統的なサボタージュと

絞殺をめざしている」(プロフィンテルン・ストラスブルク決議)社民潮流との斗いの本格化にかかる結合を真の実体的な、

経済的な結合に斗いとすることが絶対に重要である。

第三に、「改良主義的労働組合機構の組織的なスト破りの戦術」(同右)の前に屈することなく、先進的な全国の電通労働者によって防衛されてきた。全電通における大量の停職処分と統制処分に対する反撃を単に電通労働者の問題としてではなく、全国の革命派労働運動の重要な課題として斗い抜かねばならない。

かかる展開を基軸として、七六春闘の主体的・革命的前進を

そして、国際主義者が労働運動の上層の本工の枠内でより多く賃金を得る斗いではなく、全労働者の利益を防衛し、とりわけ、下層労働者に集中される合理化・失業・労災・職業病等の攻撃を全労働者の課題として反撃しなければならない。

全ての同志諸君！

国際主義派の完全な独自性を有した革命的労働運動の創出のために共に斗おう！

七六 反合反侵略春闢の革命的前進に向けて

一、國際情勢は第一に、一九七五年のベトナム

民の勝利、第二に一九七四年以降の資本主義世界をおおう長期不況一過剩生産恐慌にあらわれるよう、國際帝國主義、國際独占体の危機の深化をあらわしている。

一九三〇年代における資本主義各国の長期不況が、独目的通貨圏の形成から、独伊日三国防共協定を経て、独日帝国主義を國際反革命の突撃隊となしつつ、直接的な侵略戦争へと突き進み、それは、同時に対中、対ソ戦として、革命戦争と國際反革命戦争としての兼用となる。このことは、

ロレタリアートの敗北は、独日伊帝国主義 Block 対米英仏
帝国主義及びソ同盟との Block の戦争に転化した。
かかる第二次帝国主義戦争の中で、勝利したプローフクの中で、
米帝国主義のヘゲモニーは貫徹され、部分的な共産主義者の努力にも関わらず、米帝を盟主とする戦後反革命は圧倒的な勝利をもたらす。主張するに、独仏日等帝国主義 Block に対し占め、一九五三—五四年ジエネーブ協定に至る第二次大戦後の相対的定期の開始を許す。
我々はドイツ・ファシズムの前に敗北した、コミニテレン

強といわれたドイツ・プロレタリアートの一九三二—三三年の敗北を徹底的に総括しきる中からプロフインテルン運動の復権を通じて、帝国主義心臓部における未完のプロレタリア独裁・ソビエト権力型革命と/or、「一九七〇年代後期を賣ぐ、ノーノ

タリア権力紛争への前進として、かかる相対的安定期の終了と戰後第三期の開始という時期における、その最初の苦闘として、旧来の革命派の労働運動の理論の中にはらまれた、社民潮流との関係に対する一切のあいまいさを払拭し、まさに日帝の侵略反革命体制の支柱へと、尚かつ労働者大衆を包摂しながら、資本家階級の防波堤として、転化しつつある社民潮流への決定的な打撃と、それからの訣別を組織化しうる潮流へと飛躍を開いたとらねばならない。

こそ、殖民寡頭と、その労働組合官僚機構からの訛別をなしきらない限り、日帝は、かかる市民潮流と労働組合官僚機構構を、その侵略反革命体制の支柱としながら、アラブ民族とイスラエル帝国主義、対ソ戦と独帝国主義といった対比の中で、ならば、朝鮮民族の祖国統一勢力に対する最も反革命的な帝国主義として、日本帝国主義とその下に包摂された労働大衆の転化を許すであろう。

我々は、ナチスファシズムの制圧下で、レーニンの帝国主義で、戦争の自國政府の敗北というテーマ、とりわけ、独ソ戦において、独帝国主義の反革命戦争の敗北の為に、一切の努力を傾倒した最も革命的なドイツ・プロレタリアートの（ゾルゲや赤色楽団のような国家的スペイを含む）抵抗運動や反革命軍隊、米帝の制圧下に、米帝のひ護の下に吹きあれた反革命白色テロルに抗しつつ、翻いぬかれた、一九四八年四月三日の濟州島蜂起や太白山、智異山武装バルツァン戦争及び一九五〇年六月二五日以降の朝鮮解放戦争に深い敬意を払いつつ、尚かつ朝鮮への侵略反革命戦争前夜における、レーニンが帝国主義論の帰結として、未完のテーマとして残したプロフィンテルン・テーマの可能性に一切をかけた、日本プロレタリアートの帝国主義の侵略反革命への攻勢を説いてらねばならない。

第二次大戦後の戦後反革命は、とりわけ、帝國主義・プロレタリアートの武装闘争への立ち入りを主な目的としている。

反革命性に対する観視の中で決定的な敗北を許した。

の諸論争を切り捨てる（それは当然、在日朝鮮人の全ゆる鬨いの歴史を、「共産主義者」の側がプロレタリアートの歴史から消去することを意味したが）ことによって、同時にそれは、社民の反革命性、まさに朝鮮人民への日本プロレタリアートの血債をいうならば、その最大の決定的な責任者としての総評民同の反革命性を明らかにするのではなく、それを逆に隠ベイし、共産主義者のマヌーバー（策略）としての社民との統一戦線を明らかにすることなく、そのことを議会主義・平和革命路線の下に自己目的化し、日朝プロレタリアートの歴史的関係の現実の承認として、一九五六年共和国南北外相声明とその路線としての朝鮮連の民族教育民族的権利の闘争に対して、今日その在日朝鮮人・韓国人二一世に對する歴史的成果に對して、何もなし得なかつた。（とりわけ産業プロレタリアートよりの朝鮮人の徹底した排除に對して）日本プロレタリアートの痛苦な現実を總括しつゝ、尚かつ、兩日外相声明としてあらわれた歴史的現実を日本プロレタリアートの側から何ら努力するのではなし、最大限の政治課題としての、「朝鮮問題」を、日本プロレタリアートの側から消し去り、それも民主主義と反動一般の問題にすりかえた。

(6)

今日尚一部の階級戦線において、かかるプロレタリア戦力闘争としての側面をはらむ。対社民との競争と、党派闘争としての対日共との競争が混同され、原則としてのプロフィンテルン路線が、そのことによって、多くの現実的メリットを失うが故に、今尚、社民との融和路線、社民のひ護の下における反日共の闘いは展開されつつも、それは社民に依拠した闘いである。かかる点を試すことなく、又明確な対社民戦略の意志一致もない。我々は七〇年代前半期における紹評青年部運動、あるいは七〇年代後半期における青年部組合下部機関の奪取、その展開を否定している訳ではなく、逆に、その革命的暮題、革命的弁証法的展開をこそ主張しているのであって、その展開の中に常にプロレタリアートの利害をこそが大胆にかげられなくてはならない。

(注) 「強大な労働大衆が労働組合に流れこみつあり、またこれら大衆が組合官僚主義に反対して、経済闘争を行ないつつあるということは客観的には革命的性格をもっているのであるから各国の共産主義者は、資本主義の打倒と共に主義の為の意識的戦闘機関にかかるために組合に加入すべきである。」

「全ての労働組合から自ら身をひいたり、あるいは別個の組合を創設するような人為的な企ては、共産主義運動にとっては極度に危険である。

ただし、組合官僚側からの例外的な暴力行為、例えば革命的組合支部督和見主義的組合本部によって解散せしめられるような場合（あるいは組合貴族にのみ奉仕するような偏狭な政策、即ち未熟練大衆を組合に加入せしめないような政策によってやむを得ない場合は別である。

を最も進んだ、そして階級意識に目ざめた労働者から引きはなし、ブルジョアジーと裏で手をつないでいる日和見主義的指導者に、彼らを引き渡すという危険を内包する。

労働大衆の不決断、彼らの知的無足見、日和見主義指導者の見かけだけの主張に対する感受性は、激化する競争の過程においてのみ克服される。即ち、プロレタリアートの広範な層は彼ら自身の経験から資本主義經濟組織の中で人間らしい生活条件をうることは不可能であることを学び、又進んだ共産主義的労働者は、經濟競争を通じて単なる共産主義的理念（例えば、プロレタリア独裁という理念）の伝達者たるだけでなく、競争について）として、いかに行動すべきかを学ぶからである。

このようない方法によつてのみ共産主義者は、日和見的組合指導者を排除することができる。このような方法によつてのみ共産主義者は労働組合運動の先頭にたち、組合を共産主義的革命的闘争の機関（プローフィンテルン）にかえることができる。

「共産主義者は労働組合の形態よりも、むしろその目的と性格により大きい重要性をもたせるものであり、したがつて組合の分裂を避けることが組合内での革命的仕事を放棄し、組合を革

命的闘争の道具たらしめ、プロレタリアートの最も搾取されてる層を組織する」――こうした立場を

だが、こうした分裂が必要であることがはつきりした場合でも、共産主義者が日和見主義指導とその戦術に対する不斷の闘争と広範な労働大衆の経済闘争への参加を通じて、大衆がまだ理解していないようなはるか先の革命的目的のためにではなくて、彼らの経済闘争における労働階級の最も直接かつ実際上の利益のために分裂が必要であることを広範な労働大衆に納得させた時にのみ、このような分裂が実行されるべきである。」

(コミニテルン二大会 一九一〇 労働組合テーゼ)

(注)「労働者保護立法と労働組合とは労働者階級の状態を改善するという目的にかなっているというフレンターノ氏(ドイツの講壇社会主義者)が常々くり返した声明は、決して彼独自の発見ではない。「イギリスにおける労働者階級の状態」や「哲学の貧困」から「資本論」や私の最近の著述類やに至るまでマルクスと私とはこのことを何百回も、しかしきわめて多くの制限をつけて、書いていた。

第一に、抵抗―職業団体の有利な作用は、中位の商況と良好な商況との時に限られる。停滞と恐慌の時期にはこの作用は役に立たない。抵抗―職業団体（労働組合）は（産業予備軍―失業者）の不吉な作用を麻痺させる事ができるという主張は、笑うべきだほらである。そして、第二に―より重要でない他の制限を別とすれば―立法の保護も職業団体の抵抗も除去されるべき主要なもの、即ち資本家階級と労働者階級との間の対立をたえずあらわに生産している資本関係を除去しない。賃金労働者の大衆は終身賃金労働のうきめにあっており、近代の大産業が全ての生産部門をますます我がものにするにつれ、賃金労働者と資本家の間のケンカはいよいよ深くなる。だが、ブレンターノ氏は賃金奴隸をできるものなら満足している賃金奴隸にしておきたかったから、そこで彼は労働者保護、職業組合（労働組合）の抵抗、くだらぬ社会立法その他を誇張して、すばらしいものにせざるを得ない。」（社民一民同派のようだ（マルクス・エンゲルス 労働組合論）

資本家階級の攻撃

三、すでに、六〇年代後半期・七〇年代前半期を通じて、帝国主義の國際反革命の一翼としての侵略反革命体制を着々と構築してきた日帝ブルジョアジーにとって、七四年以降の國際的長期不況下における労働者階級への攻撃は、侵略反革命への不可欠の前提としての、帝王主義本国プロレタリアートへのアメー超過利潤のおこぼれから、今日激化する帝王主義間の世界再分割戦は、再び本国労働者への取奪、搾取、抑圧、譲属の強化としてその攻撃があるにも関わらず、まさにかかる攻撃の防波堤としての総評民間体制の美辞麗句と謂いへの幻想を大衆は見破ることができていな
い。

ても、第三期階級闘争の時代における社民主要打撲論、プロフィンテルン路線の原則をかかげプロレタリア権力競争の内部に社民官僚機構との闘いを位置づけることができず、他方において、民同の危機自動崩壊（それは資本主義・帝国主義の自動崩壊はありえないのと同じく、革命的潮流による労働大衆の奪還によってしか崩壊しない。）を夢想しつつ、相対的安定期の時代における民同派の反共政治の枠内でありえた社民との蜜月時代の崩壊を恐れ、その崩壊を一步でも遅らそうとする諸党派に満ちているからである。

革マル等においてすら、危機の時代における経営参加が語られ經營参加の幻想によって資本主義の危機の防波堤としての自己の足下に、かつ、朝鮮への侵略反革命体制の支柱としての自己の足下に、勤労大衆を縛りつけんとする野望をかかげる中には、我々は、開いの幻想に対してはそれをはつきりと暴露し、何が春闘の際なのかをはつきりと勤労大衆の前に明示しなければならないでは、何が開いの幻想なのか。それは紹評民同が七〇年代前半期の春闘の時代において既に、反合闘争反侵略闘争に対置するものとしてかかげた、大幅賃上げ・スト権奪還のストライガングである七五春闘における長期セネスト・七五スト権闘争における長期セネストこそは、紹評民同体制の七五春闘における敗北・裏切りを隠べし、資本主義の危機の時代において、賃金闘争は、生活権防衛闘争としてのみ果敢に斗いうるのであって、最大の階級攻防の課題が雇用合理化・新たな産業合理化・天皇訪米を始めとする新たな政治反動にあつたこと、かかる斗いを全く回避しながら尚かつ労働大衆に斗いのボーズの幻想を与えること、かかる論点を本質として、とりわけ、民同体制の急速な反動化を大衆に對してあざむくものとして、ひたすら労使の密通の虚構が暴露されるのを恐れつつ、「斗い抜かれ」かつ中止されたのである。

一般的に七五春闘は、第一に、大幅賃上げについて、政府・自民党・日経連・経団連の一五%ガイドライン攻撃に屈服し、妥結平均は一三・一%であり、インフレ経済に完全に追いこされた賃闘であり、

第三に、失業攻撃と一五%ガイドラインを結合させ、雇用が貨上
りかの二者择一を既成労働組合に承認させその承認の下に、一時船
休体制を逼使しつつ、希望退職という名による首切りをわざかの
一ガンであることが暴露され、

大衆に対する社民のマヌーバーであり、今日、労働者階級における革命的潮流の現段階において、反攻に転する防衛的段階としての今七六春闘における斗いの際は何よりも、再び日経連が七四年一二月に成立した雇用保険法下における一時帰休・希望退職攻撃のように、雇用調整給付金制度の期間が七五日（三ヶ月）でもまだ少ないとし、二年への大幅延長を「雇用安定臨時措置法による緊急時限立法」として二年休職者の大量創出によって、日経連が言う、何の根拠もないが、製造業労働者一五〇〇万人中、一三・五%（二〇〇万人）の過剰労働力に対する大量解雇攻撃であることをはっきりと明らかにし、賃上げが雇用か、或いは経営参加という攻撃に対して、何よりも一切の解雇を許さない、一人の解雇も許さない開いこそが、プロレタリアートの斗いの主要な環であることをはっきりさせ、その斗いを中心にしてのみ、防衛的な賃金闘争があることを大胆に宣伝しなければならない。

例えば、東交に対する攻撃において、「経営健全計画」と真向うから斗い、高齢者、病弱者、職業病リ病者、婦人労働者に対する解雇攻撃の全てを防衛し、その上に全ゆるブルジ・アジーからの攻撃に対して、一步もひくことなく、セロ・ペーセントの地点から賃上げ闘争を斗うのか、逆に、「経営健全計画」を認め、経営参加を進め、その下で、大幅賃上げ・ストラトダム闘争を斗うのか、その二つの選択として、鮮明に問われねばならない。

そして、ストラトダム闘争に対しては、戦後産別会議の自然発生的諸闘争に対して、米帝の南朝鮮人民に対する国際反革命と密接な結合の中で、下山、三属、松川事件に至るフレーム・アップと、ドッヂラインによる大量解雇、レッドバージ攻撃に至る一連の反革命攻撃の一環として政令二〇一号があり、かかる政策の結果として、産別会議の崩壊と、朝鮮人民に対する日本プロレタリアートの裏切りがあり、かかる現実の容認の上に、相対的安定期における資本主義安定の自動調節弁としての春闘である。それは、とりわけ、一九五七年國勞新潟闘争における大量処分の承認とひきかえである。

一勢力の台頭という新たな条件下において、政策的半合法化の法輪的承認は、社民官僚機構の完全な帝國主義国家権力機構の部分化として、革命的左翼に対する完全なロックアウト体制と一緒に与えられるが、逆に、プロレタリア権力闘争の一部分として、朝鮮人民に対する血債をかけた闘争の中で、階級的力關係の諸結果として、半合法的状況をから取るしかないものである。かかる斗いは、革命的左翼において、今日、直ちに着手しえるというものではない。

我々は、まずもって七六春闘において、それを反合反侵略の斗いとして、文字通り、きれいことでなく斗おうとするのであれば、日帝一民同体制の大額賃上げ・ストラトダム闘争の左足となるのではなく、かかる斗いが日帝一民同体制のマヌーバーであり階級攻撃の環がそらされているのであり、最重要の課題が一人の解雇も許さない、一人のリ病者も許さない、という労働者階級の足下の現実からしか開いを出発させることはできない。何かしら大幅賃上げ・ストラトダムの日帝一民同体制の組合官僚機構が強化され、職場での開いが圧殺され、労働者の日和見主義、本工主義が隠れられるとともに、大量の一時帰休・希望退職攻撃を許した七五

我々はかかる現実の良心的な労働者大衆をもおおっている常識化された春闘下において最も革命的な少数派として断固として、反失業、職業病戰線を構築し、全金本山、東交、電通船橋の斗いと結合させ、明確に七〇年代後期の反合・反侵略春闘を見すえ、入管・部落解放・沖縄解放・障害者解放・婦人解放の諸闘争との計画的な結合と推進によって、日帝一民同体制の虚構の中の前進でなく、プロファインテルンを見すえた確固たる前進を斗い取らう。

（3）開いの具体的課題と我々の任務

四、七六春闘をめぐる経済状勢の特徴は、一九七四年以降の長期不況下において、ますます激化する。当然のことながら、奇国王義としての国際反革命同盟を前提としつつ、それは韓国での反革命、イスラエルでの反革命、アンゴラでの反革命、チリでの反革命等を包摂しつつ、日帝は朝鮮への侵略の強化と、他方においてアラブ諸國家への資本輸出を急増させつつ、「七六年度も前半は平穏に推移しよう。しかし、後半に入ると、第一に世界景気の回復が各国並みをそろえるので、国際商品市況が高騰はじめる。第二に国内でも次第にGDPギャップが縮少はじめめる。こうしたことから、年度後半の物価上昇率は「瞬間風速」で鉤先の百点%、消費者物価八%まで加速し、インフレーションは警戒ラインに入っていくであろう。七六年度平均の物価上昇率は、鉤先物価四・九%，消費者物価七%と予測される。」（資金と社会保障春闘経済説本）

世界各国の粗鋼生産高

	ソ連	一九七四年	一九七一年
米	一三五		一一八
西独	五三	九〇	
中	二七	三七	
世界	七一〇	一三	
		一〇	
ECC九ヶ国	一五六		

雇用調整給付金 一九七五・一一八月

電気機器	四〇〇万人・日	七三億円
一般機械	二三三万人・日	五四億円
全産業計	一七九三万人・日	三七四億円
鉄・鋼	一六一万人・日	四〇億円

と言われるようになり、今七六春闘での $\frac{1}{2}$ %ガイドラインは七六年後期のインフレの「瞬間風速」ににおいていかれるのであり、今日すでに百万人をこえる「完全失業者」に加えて、日経連がう所の過剰労働力は二百万人であり、そのため、雇用安定臨時措置法をつくって國家の負担によって、二年の特別休職者をテコに独占利潤を維持し、失業者を増大し、新たな貧富の格差を拡大せんとしているのである。

企業内合理化は徹底的であり、電機産業等においては企業内保

安処分体制を先行的に形成しつつ、総評民同の国民春闘路線とそれがあざむかれている労働大衆の情勢認識の甘さをあざ笑いつ

労働強化を低賃金の下で、極限にまで高めんとしているのである。

更に、三木自民党政の第四次不況対策は、

1. 東北・上越新幹線建設を始めとする総額二兆円の財政支出による総額三兆円の需要創出

2. その財源をまかなうための郵便、国鉄を始めとする公共料金値上げと三兆五千億円の公債発行の二本立てであり、

それは一九七四年九月の産業構造審議会答申を手直しした通産省の「産業構造の長期ビジョン」によれば、一九八五年には、

海外投資残高を七四年末の八四億ドルの六倍四八一億ドル（七〇年価格）にふやし、二六〇万人の外国人労働者を雇用し、海外生産高を七四年の五四億ドルの十倍近い五〇四億ドルにする

いう日帝ブルジョアジーの野望と一体であり、それは、富の少數者への集中と、他方において、「貧困、抑圧、隸属、墮落、搾取はますます増大してゆくが、しかし、また、絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結合され組織される労働者階級の反抗も増大してゆく。」（カール・マルクス「資本論」）傾向が労働運動における社民潮流を、その反抗への最大の防波堤と化しつつ、増大していくのである。

そして、相対的安定期そのものが、第三世界に対する徹底した収奪・搾取の上に成立してきたのであって、現代帝国主義の寄生性と腐朽化の増大はかかる第三世界への徹底した犠牲の上に成立した。戦後世界の安定、民主主義に対し、ベトナム、アラブ、アンゴラ、朝鮮人民を先頭とする斗いは帝国主義の敗北と妥協をひきだしたが（例えば石油価格の引上げ）ただ、國際プロレタリアート・革命勢力としての團結のみが、そういふ諸妥協を、民族解放闘争、人民民主主義闘争のテコたりうるのであるが、現実には、帝国主義は第三世界の斗いの一部をすら自己の底知れぬ腐敗の中にのみこみ、アラブ諸国家の一部においてはシナイ協定によるまき返しを通じてはかり知れぬ貧富の差のより一層の拡大をまきちらしつつ、その汚泥をまきちらしている。

我が日本プロレタリアートの斗いの敗北の一いつが朝鮮とアラブの買弁資本を肥えふとらせ、銳く第三世界人民の闘いに敵対するものである。かかる七〇年代後期における反侵略反合春闘への転換として、七六春闘は位置づけられねばならない。

五、雇用保険法はそれまでの失業保険法を全面的に改悪し、かかる改悪へのエサが七四春闘における三〇%の賃上げ）婦人や、日雇い労働者に対する失業保険の給付を大幅に改悪し、労働者から、直接、強制的に徴収してきた失業保険の積立金を政府が民間企業の「一時帰休」のためにつぎこむことができるようとした。

即ち、一時帰休を実施する事業主に対し、休業保障の二分の一（中小企業は三分の二）を雇用保険財政から支給することが決められた。この制度は七五年四月一日から実施された。

他方、七五国会において、育児休業法が成立し、七六年四月一日より実施される。それは、一九七四年一月、中央児童福祉審議会（中児審）答申の「育児休業制度の普及等により育児の責任を持ちながら働く婦人の労働条件の改善を一層推進する」ととて、家庭保育において母親が果す役割の重要性を再認識し、「にそつて、同中間答申の「保育七原則」で主張した「母親よ家庭に帰れ」という攻撃としてあり、その内容は

1. 対象が公務員としての教員、看護婦、保母

2. 当局の許可事項であり、当事者の選択権。一年以内、原職復

帰。

3. 無給。人事院勧告で八%程度の給付を行なう。

という内容を含みつつ、産休の延長、産休後の勤務条件の改善、職場保育所、地域保育所設置運動と、対立し、家庭保育と婦人への失業攻撃の一翼として、広汎に進出した婦人労働者の小ブル的な婦人への解体をねらうものに他ならない。

又、ストライキ闘争において八日間ストの成果としての「専問懇」としての答申は、かかる闘いの成果にも関らず、公制答申よりはるかに後退したものであり、「争議行為が行なわれた時は改正に処分せよ。職場のビラはり、暴力、減産競争という恒常的サポートージなど、無秩序な状態を一掃すること、経営形態については別の機關をもうけて検討すること、争議行為の抑制措置として民事上の損害賠償制度の強化、刑事的訴追の実行等」かかるむき出しにされた諸攻撃に対して、民団派のストライキ闘争の左足に見られるブルジョアジーの攻撃の意図を見抜き、かかる攻撃と対決しうる闘いをこそ、今日革命派が機関を掌握している観点において、一切の統制処分を恐れることなく闘わねばならない。

又、労働省は七五年二月五日ケイ肩腕症候群に関して、「ギーパンチャー等上級作業に基づく疾病的業務上外の認定作業について」の労働省基準局長より都道府県労基局長あての五九号通達を出した。それによれば、現実の三年・五年と長期療養を余儀なくされている実態の中での三年打切り制度の強化等をねらいながら「適切な治療を行なえば三ヶ月で治る。治らなければそれは他の疾病だ」と露骨な患者切り捨てを宣言し、雇用保険法と合わせて決起しつつある韓国民衆や、その反朴民主化闘争の地平と強力ゆ着に対し、原則的に粘り強く斗い、完全な独自性を獲得した闘争機関を獲得せねばならない。

他方において、現実の職場大衆と密着し、三・一九総評青年協中央行動や、今日の総評南大阪地区評の斗いの闘争の一翼を担いつつ、他方でかかる昂揚と裏腹に存在する、革命派と社民潮流との連帶の下に斗われている在日韓国人民主団体の斗いと明確な支持・連帶の諸行動を斗い抜かなくてはならない。

この斗いは、他方において、日帝の急速なる対韓進出の中で、職業病戦線の地域的構築を斗い取り、更に、今日の争議拠点の斗いにおいて、第一に、個別資本との斗いを徹底的に激化させ、第二に同一産業の労働者を本工一下請を貫ぬいて獲得し、産別内における國際主義派と排外主義派、社民潮流との攻防の拠点となり、第三に、官公労においては全国的な反対派の展望を堅持し斗争わなくてはならない。

それは、第一に、全日本山闘争においては、この間の後退的局面を巻返す全国的な逆襲を、東北、首都圈、関西を貫ぬく革命派労働運動の團結でなししかねばならない。本山資本を徹底的な敗北に追いつめる闘いは、全国の労働者の総力をかけた実力闘争のみによって可能であり、かかる闘争のケン引車であり、權

◎ 婦人労働者の斗いの前進を打ち固め、 プロレタリア婦人解放闘争の地平を切り開け！

1. ベトナム・インドシナ人民の米帝に対する民族解放一革命戦争の完全勝利によって、アジアにおいては、帝国主義と民族解放勢力の激突として、朝鮮において急速に煮つまっている。朝鮮民族の伝統的反帝闘争のエネルギーは、金芝河をはじめと青年学生の「祖国の解放のためには生命をも投げうつ」決意と先駆的闘いとして、反米帝一反日帝一朴打倒一祖国統一の斗いは着実に前進している。

こうした革命勢力の巨大なうねりに対し、國際帝國主義は、アジアからの米帝の後退以来、米独日國際反革命枢軸体制をNATO一安保を貫いて強化しながら、とりわけ、日米安保体制を米日韓反革命臨戦体制への再編をもって必死のまき返しを図らんとしている。日帝においては、今日、自らの命運を侵略主義、排外主義、社会排外主義をその侵略体制の社会的支柱としながら、天皇を政治過程へ登場させ、天皇制イデオロギーを統合軸としたファシズム攻撃を朝鮮に向けた侵略反革命戦争にむけて公然と準備している。それは、七五年四月、日米外相会議以来、七・一七皇子訪沖、九・三〇天皇訪米を貫き、七六年一・一七皇太子再訪沖として侵略主義、排外主義をあおり、労働者大衆を侵略反革命に動員していくための布石を打ってきた。今日、國際的過剰生産恐慌と一方における民族解放闘争の前進の中で、帝国主義の危機は深化してきている。七四年以後、國際的長期不況下にあって、雇用合理化、産業合理化の嵐は吹き荒れ、今や、構造的失業者は二百万を越え、他方、現場の労働者に対する低賃金労働強化は、労災、職業病の増大をもたらし、その矢面には、パート、臨時、季節工、社外工、婦人労働者がたてられている。こうした中で、精神的肉体的疲弊は蓄積し、生活苦は日毎に深まり、日常的不満はうつ積している。婦人労働者に対しては、帝国主義の差別分断支配の一環に歴史的封建的ブルジョア女性差別を拡大させ、それをテコに七年雇用保険法の成立を強行し、育児休業制度の導入をもって本工労働者を買収し、分断し、改良主義的に階級解体攻撃をかけてきた。同時にこの攻撃を表裏一体のものとして、生体、産休をはじめとする母性保護の既得権の実際的なハク奪を強行させてきた。これら産業合理化、雇用合理化、差別分断攻撃の政治的意図が一一・五国際婦人年日本婦人問題会議において暴き出されていった。この会議の意図は、天皇、皇后の列席みだように再び婦人労働者を朝鮮侵略反革命戦争体制の銃後の先兵として仕立て上げることに他ならない。

一一・五国際婦人年日本婦人問題会議は、文字通りの革命か反革命かの時代の中で、日帝によってその先兵として育成されたブルジョア婦人、小ブルジョア婦人が六月メキシコ会議において「帝国主義、ショニズム、アバリスト、外国の支配、外国の占領と斗う婦人の役割を考慮せよ」と訴え、帝国主義の搾取と他民族抑圧に対する斗いを抜きに一般的に婦人の連帯はない、米、西独につきつけていた第三世界の婦人達の斗いに敗北していくことに對し、日帝の巻返しであった。この中で日共は、第三世界の婦人達の決議を単純に美化し、自分達は中立を裝い他方で帝国主義内部における攻撃に対し、制度化要求路の下に屈服し、帝国主義の婦人斗いを放棄するのみならず、帝国

王義の婦人侵略体制への動員に自ら加担しつつある。エキンコ宣言は帝国主義と対決して斗った第三世界婦人達の勝利として、その成果は評価されながらも、何よりも國際婦人年そのものが、日帝の朝鮮侵略反革命戦争を目前にすえた社会的支柱の育成一拡大の一環として、婦人労働者の小ブル婦人への解体攻撃としてあり、このことを見すえた帝国主義國婦人プロレタリアートの不屈の斗いが鋭く問われているのである。

2. 七五春闘は、帝国主義の危機の時代において、徹底して社共一総評民同体制の国民春闘路線をあばき出していくた。帝国主義の社会的支柱、政治的支柱として労働運動内部の排外主義社会排外主義潮流は七五春闘において、全国一律最賃制闘争によりて労働者大衆をあざむき、大幅賃上げのスローガンは、政府・自民党、日経連による「五%ガイドライン」への屈服としてすりかえられ、合理化が賃上げかの二者択一を労働組合官僚に迫り、賃上げの名の下に合理化に屈服した労働組合官僚は、一時帰休、希望退職、出向、応援の名において、資本の手先となり下つていった。それは新たな産業合理化と政治反動の嵐の中で、労働者階級の利害を裏切り、他階級の代表者としてすりかわっていく社民勢力の育成が、日帝の命運にとって重要な環なのである。今日、総評の民間勢力の最左派においてすら、帝国主義の危機の時代において、自らの本工主義の利益の下に経営参加が叫ばれ、企業と労働者の運命一体論を労働者大衆の意識性の中に植えつけようとしている。

このような中で、総評婦人運動は、炭婦協を始めとする婦人の戦闘性に依拠しつつ、そのイデオロギー的統合として「平和と民主主義」即ち「子供をすこやかに育てる。幸せな母になる平和を守る。」を三本柱にかけ、婦人運動を、婦人の解放と斗争、婦人労働者の斗いを先頭に、婦人解放の戦列を斗いとするのではなく、全ての斗いを平均化し、婦人の即目的要求においてどめた。とりわけ、その代表的な母親大会は、「幸せな母になる」「母性を守る」という名の下に歴史的女性差別をおおい隠し、労働者としての階級的視点を欠落させた母親の願いとして推進してきた。そして國際婦人年の強力な推進者としてあつた総評婦人運動の代表者達は二〇年間にわたる総評の運動が炭労の主婦達や、東交の女子車掌を切り捨て、今日、電通の婦人労働者の切り捨ての中、自らを買収するという二重の抑圧評幹部の代表者としてあり、一一・五日本会議への登場をもつて、自ら婦人労働者を切り捨てる本工労働運動の支柱であり、小ブル婦人層へと解体していくのである。このことは、五六〇年代の相対的安定期において、日本婦人運動の三本柱をなした、日本母親大会（一九五五年より）、働く婦人の中央集会（一九五六年より）、部落解放婦人集会（一九五六年より）

が苦しみと涙の斗いから開始されつゝも、高度成長経済の中では解体され、尚かつ数多くの勤労婦人、部落勤労婦人等が新たな抑圧と搾取と差別分断の攻撃をうけているにもかかわらず、それらが斗う婦人の結集団体とはなりえず、多くの矛盾を露呈している。

現在、日帝による新たな産業合理化がパート、臨時、季節、社外工への失業攻撃を踏み台にした本工労働者の利害へと屈服させ、新たな政治反動が天皇訪米の過程において明解に打ち出された侵略戦争の準備の中に労働者階級一婦人労働者を総動員していく体制として打ち固められつつあることに対し、わずかの改良的要求とひきかえに反合反侵略のスローガンを引きずり降ろさんとする社共婦人運動の労働運動への支配を許すならば、「産報化」「皇国の母」への道として育休攻撃、労災保険法改悪攻撃への屈服があり、我々は何としても、戦前の評議会、全協の婦人達の伝統を継承し、婦人労働者への攻撃を帝国主義の階級解体攻撃の環としてとらえ、その斗いの中から確固として斗うプロレタリア婦人の戦列を構築しなくてはならない。

朝鮮の婦人達は、一九〇五年ウツミ保護条約以後、一九一〇年日韓併合条約、一九四五年八・一五に至るまで、李氏王朝によって築き上げられた封建的女性支配を根底にすえながら、日本の植民地支配によって虐殺、暴行、買春の数限りない迫害の中で抑圧されてきた。そして、一九四五年北緯三八度線南北分断によって、「八・一五朝鮮解放」は日帝軍隊にかわり、米帝軍隊の統治へと南朝鮮人民にとって再び、いや、どの過去にもまさる斗いが開始されるのである。

戦後、日本労働者階級が在日朝鮮人の血の犠牲によって切開された戦後革命期を日共指導部の裏切りの中で失つてきた時、

朝鮮においては、濟州島蜂起をはじめ、數度の労働者のゼネストと蜂起を幾多の犠牲を払いながら斗い抜いてきた。朝鮮の婦人達は一九二〇—三〇年代を貫いて斗い、一九三〇年代金日の指揮の下に抗日武装ペルチザン闘争へと大胆に登場し、一九三二年、人民内部においても差別一迫害をうけていた、濟州島の海女の斗い等、歴史の転換期に重要な役割を負つてきた。一九四五年朝鮮婦女同盟の結成、四六年三月婦人・子供を中心とした米よこせ闘争等、封建的女性差別と、それをテコにしながらの帝国主義者の女性支配に対し、「飢餓とテロルの巷から」「惜しみなく血を流して」「南半部にすむ「自らの宿命」として斗い続けてきたのである。こうした歴史的な斗いの精神は、現在、反日反朴の斗いの最先頭において斗う金芝河の母や、人民革命党事件の被告達の妻、東亜日報の婦人労働者、梨花女子大生、在日韓国人「政治犯」チヨ・チヨルゲさんの妻や数多くの女性達の民族の誇りと革命的精神として継承され、朴一KC IAのスペイ網を突き抜けて、英雄的に決起する多くの婦人を生み出した。我々はこうした婦人達の斗いに深い敬意の念をもつて、尚かつ抑圧民族としての斗いの歴史の血債をかけて、日本の勤労婦人の斗いを準備していかなければならない。

かつて、評議会、全協の婦人達は、九州水平社の婦人達と共に日本帝国主義一天皇制ファシズム下の攻撃の中、朝鮮人民部落勤労大衆と共に、東洋モスリン、東交婦人部の斗いを始めとし、侵略戦争への体制下にあって、男子労働者よりも戦闘的に斗い、今日の同盟、民社党に連なる社会ファンスト達による産報化に抗して斗い抜いた。

その斗いの中で、確固たる日帝の侵略戦争への抵抗の中核体

を形成し、対中国、朝鮮、ソ連、米国に対する戦線の背後で日本帝国主義の敗北に至らしめるバルチアン闘争を斗い抜くことはできなかつた。このことは、単に戦前の婦人労働者、婦人共産主義者の問題としてのみ総括しえないのである。

ただ、言えることは、婦人が単に、婦人労働大衆の戦線においてのみでなく、帝国主義と、その労働運動における代理人としての社会排外主義（社共、社共婦人運動）に対する斗いの全戦線にたち、今日の日本の労働者人民の運動の全領域に革命的潮流を建設する斗いを共に斗うことである。

3、戦後開始された婦人運動はこの一切の総括が欠落していた。その斗いは婦人にに対する抑圧、苦しみと涙から始まり、苦しみと涙に終つた。とりわけ、戦前の日帝に対する労働者階級の敗北を現実の前提とするならば、日帝の侵略総動員体制は、男子労働者の出征兵化と共に、軍事、重化学工業において、婦人労働者への代替え労働をもたらし、戦後、苛烈な労働条件の中で、在日朝鮮人労働者が戦後労働運動の斗いの第一波であったとするなら、かかる代替えの婦人労働者集団はその次の位置にいたし、九州の炭鉱地帯においては、とりわけ、多くの部落出身婦人が朝鮮人労働者と共に鉱山労働の中枢を占めた。そして、ドッグラインによる戦後合理化と、戦後、帝国主義の生産構造の再建は、かかる戦時代替え体制への婦人労働者の組み込みから、平時生産構造への婦人労働者の排除・再配置であり、多くの婦人労働者が解雇の対象であった。

戦後、日共と産別会議はかかる集団を婦人労働者の中核体に高め上げることに失敗し、レッドバージの解雇者（本工男子）とドッグラインによる失業者との結合をなしきることができなかつた。

そして更に、戦後米帝の国際反革命攻撃の中で、中国、朝鮮日本の人民の運動が一体であり、とりわけ、国土を三八度線（旧日帝軍隊の支配領域の分割線）によって、分割され、旧日帝の支配財産を略奪し、支配機構を踏襲した米帝の支配下に南部がおされた朝鮮の解放と、日本労働者階級の解放が一体であることをつかみきれずに、朝鮮において、常に（一九四六、四七、四八年）流血の攻防が斗い抜かれているにもかかわらず、日本の労働運動は度しがたい日和見主義と經濟主義によって、正面からの連帯の斗いを回避し、一九五〇年朝鮮人民の祖国解放闘争に際して自ら、米軍の兵たんに動員され、そのことは逆に、一九五〇年代以後の日本労働者階級に対する新たな産業合連化の時代の開始をもたらした。

今日、新たな産業合連化と政治運動の嵐の中で、再びこの課題が日本労働者階級の三三%を構成する婦人労働者に鋭く問われている。

我婦人労働者の隊列は、東洋モスリンの革命的精神をうけつぎ、電通船橋の職業病闘争を全国への波及の中で帝国主義の心臓部に迫る斗いとして斗い抜いてきた。

一一・五闘争において、プロレタリア婦人の小ブル婦人への解体攻撃に対し、斗うプロレタリア婦人の隊列は確固たる戦闘的婦人労働者のヘゲモニーを確立しえないまま、分散されて取り組まれていった。今日の日帝のむき出しの攻撃に対し、銃くその心臓部を射ぬくプロレタリア独裁とプロレタリア国際主義の政治思想に打ち鍛えられた労働者階級の斗いの陣型を準備することは、これまでのプロフィンテルン運動の最前線で斗い

抜いた我々の主体的任務である。

婦人労働運動内部の社会排外主義潮流は、婦人の能力開発一女性差別の拡大を根底にすえながら、育児休業制度の導入に尽力している。彼女達は、この育児が現在の生休、産休、育児時間等の母性保護の既得権をハク奪し、育児を私的労役として婦人におしつけ、「婦人よ家庭に帰れ」ブルジョア的家族制度を打固めようとする資本階級の攻撃の環であると見ようとはしない。既得権ハク奪を育休によってすりかえようとするブルジョアジーと、育休制度によって改良主義的な前進があるとする総評婦人運動（日共・社民）のどこに階級的差異があるといふのだろうか。我々は階級間の力関係の中で労働者階級の斗争の成果として克取られた既得権は、どのような攻撃にさらされようとその地平は守り抜かなければならない。まさに、育休制度導入と一方で労基法の実質的改悪が、とりわけ、婦人への職業病、合理化を始めとする全ゆる配転と原職場からの放逐による解雇強要攻撃を中心に、この戦後労働運動の内部において本工男子労働者集団の買収とひきかえに、より劣悪な労働条件に不斷に落しこめられ、尚かつ、多くのリ病者を発生する職場を背景に、若年切り捨て労働力、中高年パート労働力の維持として進行していることをはっきりと見すえ、育休制度導入粉碎のスローガンを大胆にかかげて斗い抜こう！そしてこの斗いを産休の大幅延長（産後八週間から一六週間有休）、育児時間の拡大の具体的な職場闘争と地域、職場での0才児集団保育を斗いとする思想と当該労働者と、その地域の拠点の労働者全ての結合をもって斗い抜こう。

第二に、労災職業病闘争の最先頭に多くの婦人労働者を結集させ、男子労働者と共に彼らをもその斗いの先頭に決起させ、革命派の拠点建設を斗いとつていった電通の婦人労働者に統さ

官公勞一民間一中小未組織を貫く革命派の拠点を御用二組を

解体し、全ての婦人労働者はその最先頭に立って斗い抜こう。

第三に、労働者階級内外の一切の本工主義、排外主義、女性差別思想と斗い、マルクス・レーニン主義の旗の下、戦闘的婦人労働者の斗いと共に産主義の結合を斗いとろう。

第四に、現在の日本婦人解放運動がロシアや中国、朝鮮、ベトナムのすぐれた斗いの歴史から学びつつ、日本の婦人運動と

しては、五〇年代の小ブルの民主主義的婦人運動が帝國主義によって解体されつくした、ゼロの現実から、否、負の歴史から出発せざるを得ないその中で、七〇年代初期の婦人解放運動に多くの混乱をもたらし、未だ整理されていない。

しかし、我々は今、全国において社共にかわるブルレタリアの建設、社共にかわり、評議会、全協の伝統を継承した革命的労働運動の建設を斗う全ての同志と共に、婦人革命家の不在という否定すべき現実を大胆にのりこえ、尚かつ、戦後婦人運動が民主主義婦人運動の名の下に、全ての婦人を、とりわけ、勤労婦人と家庭婦人の要求を一体にして、自己破壊した現実を直視し、女性解放運動は女性解放運動一般として存在するではなく、もっと苦しい現実の中で斗い抜いているベトナムや朝鮮の婦人達の斗いに学び、尚かつ、日本帝国主義の現実の中で最も抑圧されて搾取されている勤労婦人、部落の勤労婦人の利益に結合し、はっきりと立脚したその斗いにおいてのみ、共産主義と結合できるのだ。その上にたって、帝国主義の女性への支配にたち向う婦人解放闘争をプロレタリア婦人を先頭に斗い抜こう。